



TITLE:

統計調査論

AUTHOR(S):

蜷川, 虎三

CITATION:

蜷川, 虎三. 統計調査論. 經濟論叢 1935, 41(6): 810-828

ISSUE DATE:

1935-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130662>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷一十四第

行發日一月二十年十和昭

論叢

消費利子の問題……………文學博士 高田保馬
車稅の基本的問題……………法學博士 神戶正雄

時論

産業組合製絲と養蠶農家……………經濟學博士 八木芳之助

研究

統計調査論……………經濟學博士 蛭川虎三
資本制生産の發展と商業關係……………經濟學士 堀新一
株式價格構成の原理……………經濟學士 石田興平

說苑

朝鮮に於ける金爲替本位制……………經濟學士 松岡孝兒
限界生産力說と新勞銀基金說……………經濟學士 飯田藤次
古典學派の商業概念について……………經濟學士 松井清

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十一卷乃至第四十卷論題索引
本誌第四十一卷總目錄

(禁轉載)

研究

統計調査論

蜷 川 虎 三

一

最近の傾向として、社會の各方面に於いて調査が重要視され、その必要が強調されてゐることは周知されてゐる所であらう。あらゆる政策の樹立に、經營方法の案出に、また社會批判のためには先づ社會の現實事態の認識とその關係の分析の必要なることは言を俟たぬ所であるから、若し「調査」がこの意味に於いてその役割を演ずるものであれば、之が重要視されることは勿論當然のことゝ云はねばならぬ。

併し、「調査」の重要性は、必ずしもあらゆる調査を「調査」として是認する根據にならぬことは、これ又斷るまでもない所である。蓋し調査が「調査」たるためには、それが現實事態の客觀的認識であり、その關係の科學的分析たることを要件とするものであり、之を満足せざるものは假令調査と稱するも「調査」とは認め難きものだからである。ゆゑに現在の如き調査流行心醉の時代

に於いては之を判別することに重要な意義があることと考へられる。然らば何を以て之が判別の基準となし得るであらうか。或は時に「調査」ならざる調査、「調査」の假面を被へる調査の現れる惧れある場合、この基準を明らかにして置くことは最も必要なことと云はねばならぬ。

勿論これは單に調査自體のみに限られた問題ではない。調査を前提とする政策・經營方法等の批判に於いて、前提たる調査が信じ難きものであれば、如何にその主旨に於いて美しく形式に於いて整ふが如く見へても、その目的を實現し得ぬものであつて、かゝる政策或は經營方法を承認することは不可能である。蓋し現實を認識せず社會の合法則性を把握せずして政策或は經營方法の樹立實行は出來ぬことであり、若し之が可能とすれば全く偶然の結果に他ならぬからである。従つてこれらの批判は、直接に政策或は經營方法を取上げないでも、その前提たる調査の批判によつても達し得る所である。或は寧ろ、調査に於いてそれらの本質的なものが端的に捉へ易いとも云ひ得るであらう。この意味に於いて調査の批判は單に調査自體の問題以外に重要な意義をもつものである¹⁾。

調査の性質は、その調査方法によつて根本的な規定を受ける。従つて調査の批判は調査方法の批判でなければならぬ。而して調査方法が「調査」の方法である限り、その一般的要請は、それが科學的たることに在る。この點に就いては、抽象的意味に於いては何人も異存のいな所であらうが、具體的な問題になると、往々にしてこの一般的要請さへ顧みられず或は歪められ或は拒否さ

1) この點に就いては拙稿「漁村調査論」經濟論叢 昭10年1月參照。

れる。勿論、調査が初めから、「調査」の意圖の下に行はれぬものに就いては問題はない。併し少くとも「調査」が標榜される限りに於いては、調査方法が科學的性質をもつものであり、この性質を満足する仕方に於いて採られることが必要である。

是に於いて、各個の調査に就いてその調査方法の科學性を検討批判することが重要でありその程度如何が調査の客觀性を規定する。而して調査方法の科學性は、その理論的規定と之が實現の仕方とに於いて見ることが出来るであらう。調査方法の理論的規定は、調査が社會に關する限り、社會の合法則性の把握たる理論を前提とし、之が指導の下に、調査目的を満足する所の調査對象の規定並に之を如何に捉ふべきかの規定に他ならぬ。ゆゑに、調査方法の科學性が専らこの理論的規定の如何によつて左右さるべきことは極めて明瞭である。勿論、如何に理論的規定が明確精緻でも之が實現の仕方が適當でなければ結果の正確は期し得ない。併しかゝる技術的過程の問題は先づそれに先行する理論的規定に依存するもので、之を無視し看過することは出来ないが、調査方法の科學性を規定するものは専らその理論的規定であると云はねばならぬ。

調査方法の理論的規定の基礎を成すものは、前述の如く之を指導する理論である。例へば現在その重要性が認められてゐる農村調査に於いて、之が調査方法に理論的基礎を與へるものは、ひるくは社會を分析する理論であり、特殊的には農村の生産的地盤たる農業に關する經濟理論である。若しこの理論的指導を缺き或は之が非科學的なものであれば、勿論形だけの農村調査は出來

るであらうが眞の意味の「調査」は不可能である。現在調査の重要性が強調されながらこの點が深く留意されぬことは甚だ遺憾と云はねばならぬ。「調査」は前述の如く政策とは別個の問題である。政策はその主體の意圖・目的により客觀的事態に適應して種々に考へ得るであらうが「調査」は客觀的事態そのものゝ認識であり把握であるから、之が可能なる方法を探るでなければ意味をなさぬ。従つて、之に就いては科學的であるといふ以外に如何なる要因も含まれないしまた含んではならない。かゝる理由から、調査の指導理論は科學的理論でなければならぬと同時に、之に當る者がその點で良心的であり科學者であることが根本的に必要な條件である。いはゆる調査と稱して現在行はれてゐるものを見るとき、こゝに多くの批判の問題を見出し得るであらうが、勿論本文の問題ではない。

次に、かゝる理論的基礎の下に、調査對象並に之を具體的に捉へる方法が理論的に規定さるべきで、これが調査方法の樞軸を成すことは既に述べた所より明らかである。而してこの規定の内容を成すものは、調査對象の分析の理論、調査の地盤たる社會關係の認識、調査技術の一般的規定等で、それには先づ調査對象が規定され前提されなければならぬ。調査方法はこの前提に於いてのみ初めて問題となる。従つて一般的に調査方法を論ずるといふことは極めて抽象的となり調査方法を問題にする本來の目的に適せざることとなる。社會調査、經濟調査、經營調査など限定して調査方法を論ずるのはこの理由に基づくものであるが、從來論ぜられた所によれば、調査

對象の規定が明確でなく、従つて問題たる調査方法をその對象の性質から理論的に規定することが甚だ不充分であつた。例へば最も多く問題にされてゐる社會調査に就いて見ても、特に社會調査に於ける調査方法としての特殊性が捉へられては居らずに、極めて形式的な調査の規定が、社會事業等の目的を以て行はるゝ調査のために如何に適用されるかを常識的に説明されるに過ぎない¹⁾。現在に於ける調査の重要性に鑑み、調査方法は更に科學的意識と方法とを以て研究される必要があるであらう。今後發展せらるべき研究領域に屬する。

上述の如く、調査方法の研究は一般に等閑に附されてゐるが、たゞこの中に在つて從來特に研究され來つたものは統計調査法である。統計調査の方法としての統計調査法は統計學殊に獨逸統計學の主たる課題であつた。即ち、politische und soziale Messkunst (Bruno Hildebrandt) と謂ふも exakte, zahlenmässige Untersuchung der Erscheinungen der menschlichen Gesellschaft (Lexis) と謂ふも、要するに、統計學の問題とする所は、社會事象をその量及び量的關係に於いて把握すること並にその方法であつた。而してこの學問の發達の歴史が示す如く、近代國家の成立以來、國策の樹立遂行のためにその地盤たる國家並に國民生活の數量的調査を必要とした結果が、かかる學問の研究を促したものに他ならぬ。従つてその調査目的から、單に數量的調査といふばかりでなく「調査」としても一定の限定を受けてゐたもので、そのことはよく統計調査法の研究に現れてゐる²⁾。

1) 拙稿「社會調査と統計」 社會事業昭和10年3月。

2) Kaufmann, Theorie und Methoden der Statistik, Tübingen 1913, S. 1.

3) Vgl. H. Moeller, Statistik, Berlin u. Wien 1928, S. 8-15

ゆゑに、從來論ぜられてゐる統計調査法を問題にする場合、この歴史的に制約せられたる統計調査の意義と離れて考へることは不可能である。統計史（統計調査史）の研究の必要なる一理由もここに在る譯であるが往々にしてこの重要な點が看過されてゐる。従つて、漠然と社會の數量的調査を統計調査と考へ、從來技術的に發達し來つた所謂統計調査法を形式的に採用すれば調査の目的を達し得るかの如き誤解を生じてゐる。また統計調査法自體を論ずる者も、それが調査方法として如何なる問題をもつものか、問題の把握と批判の基準を得られずに、寧ろその技術の末節を常識的に解決することを以て満足してゐる傾向がある。勿論、之を以ても或種の調査は可能であらうが、先に述べたるが如く、かゝる調査が果して「調査」たり得るや否やは問題である。蓋し一定の調査方法を採用する理論的根據が明確でなく、調査結果が正確なりや信賴し得るや之を吟味し批判する方法を缺くからである。

この意味に於いて、既に幾多の研究と實際の經驗を積み來つた所謂統計調査法にしても「調査」のために之を無批判に採用することは出來ぬ。況んや統計調査なるの故を以て、直ちにその結果が社會現象に就いてその量及び量的關係を語るものとして受取ることとは許されぬ所である。既に概念的に一般に通じるだけこの種の調査に就いては誤解も多い譯で、我々は先づ現在に於ける統計調査の意義を明らかにしその方法の性質と問題とを究めなければならぬ。殊に先に言及した各種の調査に就いて問題にされる調査方法を見ると、その中心的な問題は何れも所謂統計調査法で、¹⁾

1) 例へば、C. Luther Ely, The Technique of Social Investigation, New York and London 1934 はその一例である。なほその Bibliography を見よ。

その意味に於いても、統計調査法の性質を明らかにして置くことは重要である。こゝに統計調査を論ずるは正にこの二つの理由によるものに他ならぬ。

二

統計調査なる言葉は普通に使はれる所であるが、統計調査が如何なる調査であるかに就いては必ずしも明瞭ではない。例へば、社會現象をその量及び量的關係に於いて捉へることが數量的調査であり、統計調査を以て數量的調査であると規定すれば、一應統計調査の一般的性質を示し得るが、併し、この規定を以てしては、單に統計調査が數量的調査で、質的調査ではないと云ふにとゞまり、如何なる量及び量的關係を問題にする調査であるか、即ち統計調査の數量的調査に於ける特質を明らかにすることは出来ない。従つてかゝる規定による限り、統計調査の方法は與へられぬ譯である。¹⁾

現在に於いても、この程度の朦朧たる觀念の下に統計調査を論ずる者がないではないが、既に獨逸の社會統計學派の統計學は之に一步を進めたる解答を與へてゐる。即ち、統計調査の對象は單なる社會現象ではなく社會の集團現象(Massenerscheinung)であり、社會的集團(soziale Massen)の大きさを測ることが統計調査の統計調査たる所以なりとし他の數量的調査と區別した。このことは統計調査に科學的性質を賦與し「調査」としての獨自の地位を占める根據を與へた點で大なる貢獻であり進歩であるが、集團そのものに關する認識と規定とは甚だ不充分且つ曖昧で、統計調

- 1) Bowley は別段にその規定を與へてはゐないが、The Measurement of Social Phenomena, London 1923, Ch. I に於ける考はこの程度にとゞまる。
- 2) この點に於ける G. von Mayr の統計學に於ける貢獻は偉大である。Die Gesetzmässigkeit im Gesellschaftsleben, München 1877, SS. 27-42. Statistik u. Gesellschaftslehre, I. Tübingen 1914, SS. 4-8.

査と統計的研究との限界が明瞭でなく、こゝに多くの混亂を含み、従つて、統計調査法に就いても、多く從來の技術を踏襲し之を説明するに過ぎずして、科學的なる調査方法としての理論的基礎を與へることが不可能であつた。

この殘された問題こそ統計調査をして「調査」として眞に科學的意義をもたしむるために重要な問題で、また現代統計學の解決すべき課題でなければならぬ。若しこの問題が解決せられねば、「調査」として客觀性をもつと一般に考へられる統計調査に就いて、その根據が何處に在るか理論的に明らかになし得ないから、従つて假令それが數量的に結果を與へると云つても、果してそれが何處まで眞實性をもつものか之を定めることが出來ないであらう。而して之が不可能だとすれば、客觀的なる調査結果として主張する根據は存在し得ないこととなり、一部の極端論者が統計を以て嘘と同視することも笑へないこととなる。寧ろさうした極端な否定論こそ科學的に正しいと認むべきであらう。

然らばこの問題は如何に解決さるべきであるか、別の機會に詳論した如く、私は、統計調査の統計調査たる所以は、それが「大量」の數量的把握たる點に存すると考へる。大量はその存在が社會的に規定せられたる集團即ち社會的集團に他ならぬから、その意味に於いて他の集團例へば自然的集團や解析的集團と區別されねばならぬ。從來の研究に於いて、統計調査の調査對象が必ずしも明瞭でなかつたのは、一般にそれを集團と觀念して「大量」として把握しなかつたことによる

1) 拙稿「現代統計學の課題」六甲臺昭和10年10月。
2) 拙著統計利用に於ける基本問題第一章。

ものである。この點に就いては既に私の指摘した所である。¹⁾

次に大量を統計調査の對象と規定しても之を數量的に把握するといふ數量は大量の如何なる量或は量的關係に於けるものであるか、それが問題になる。大量が一種の集團として大いさをもつ存在であることは述べるまでもない、従つて、大量の大いさは之が數量的把握の第一の問題である。而して、一般に集團の大いさは、集團の構成分子たる個別部分の總數或は總量を以て測られるから、大量の大いさとは即ち大量を構成する「單位」の數或は量に他ならぬ。第二に大量に就いて問題になるのはその集團性である。集團性に就いては、その方向と強度とを明らかにしなければならぬ。こゝで特に數量的に問題になるのは集團性の強度であるが、強度は部分大量の大いさと大量の大いさとの比に他ならぬから、部分大量の大いさを見る必要がある。而して部分大量の大いさとは、各個の集團性の方向から分割せられたる大量の大いさを意味する。従つて大量を數量的に把握するといふことは、大量の大いさ及び部分大量の大いさを明らかにすることに歸する。いま、かゝる大量の大いさ或は部分大量の大いさを示す値を統計値と呼ぶならば、各個の統計値が一體を成して、大量を數量的に語る譯で、この統計値の一體が即ち統計である。

この意味に於いて、大量の數量的把握即ち大量觀察は、單に大量の大いさ或は部分大量の大いさを示す統計値を機械的に幾つか求めれば足るといふものではなく、捉ふべき或は捉へねばならぬ大量を捉へ、而もその大量に就いて、必要なる部分大量が區別され、その大いさが正確に測ら

1) 同上拙著參照。

れて、大量を全面的に語るに足るだけの統計値が與へられねばならぬ¹⁾。換言すれば、(一)大量の科學的認識とその理論的把握を前提とし、(二)之に就いて問題たる集團性の方向を規定し、(三)この規定したる方向から大量を部分に分ち、(四)各部分大量に就いてその大いさ即ち之に屬する單位の數或は量を求めねばならぬ。この大量觀察の方法的規定を大量觀察法と呼ぶのであるが統計を求める限り、大量觀察法の要求を満足せねばならぬことは、この意味に於いて當然である。

併し乍ら、大量觀察が必ずしも常にその方法的規定通り行ひ得るものと考へることは出來ない。即ち、(一)一定の事情から大量觀察を行ふことが困難或は不可能の場合、(二)當面の目的が大量の數量的全面的な把握ではなく、特定の統計値を得れば満足し得る場合、等に於いては大量觀察をその方法的規定通り行ひ得ないし、また行ふ必要もない。併しこの場合に於いても、特定の統計値を得ることが必要であり、或はその程度で満足しなければならぬのであるから、之に關する合理的な方法手段が採られねばならぬ。然らばその方法手段は如何にして得られるであらうか。

それに就いては、先づ大量觀察そのものを見る必要がある。蓋し右の要求によれば、要するに、大量觀察をその方法的規定通り行はずして、而も結果だけは、出來るだけ大量觀察を合理的に行つたと同様或はそれに近いものを得ようとするのであるから、大量觀察に於いて、その過程の如何なる部分を省略し得るかを明らかにしなければならぬからである。

1) この點が往々誤解されてゐる。或る統計値或は誘導統計値を求めれば、それで統計が得られたものと考へてゐる場合が多い。かゝる考の下では所謂「統計の整備」などといふことは如何にして達せられるか、解決の道がないであらう。

大量觀察は大別して之を二過程として見ることが出来る¹⁾。即ちその理論的過程及び技術的過程が之である大量觀察に於いてその理論的過程は、之を科學的に充分満足する必要がある、之に就いて手を抜くといふやうなことはあり得ない。蓋しこの過程に於いて、一定の大量を理論的に規定し、また之を如何に數量的に把握すべきかが規定されなければならぬからである。而してこの過程の理論的規定が與へられてのみ、實際上の必要に適應した方法を探ることも可能となる。従つて、方法的規定通り大量觀察を行はねとすれば、それは技術的過程に於ける省略以外にはない。

技術的過程に於ける省略即ちその手續の省略は、二つの方面から考へられる。その一は、技術的過程の或る段階を缺いて、之を他の便宜的な方法で補ふ場合であり、その二は、技術的過程は各段階を何れも満足するのであるが、その範圍を限定縮小する場合であり、その三は本來の技術的過程を全く缺き之に代る方法を探る場合である。先づ第一の場合に就いて見るに、大量觀察に於ける技術的過程の如何なる段階を省略するかは問題であるが、それには先づ技術的過程そのものを明らかにして置く必要がある。大量觀察に於ける技術的過程は之を一般に調査票並にその運用の過程として把握し得るが、之を段階的に見れば蒐集(Erhebung)整理(Bearbeitung)に二大別し得るであらう。整理の段階に於いては之をより組織的に且つ能率的ならしむることは可能であるが、技術的に省略し得る部面は存在し得ない。併し蒐集の段階に於いては、直接に被調査者を通じて大量を捉へずに、之に代る資料があれば、その採用によつて直接の調査を省略し得る譯で

1) 拙著、統計利用に於ける基本問題、第二章。

ある。勿論、その資料が何處まで大量觀察の目的を満足し得るか問題であるが、兎に角、之によつて蒐集の過程の中最も手数を要する被調査者との關係を省くことが出来る。かゝる方法を探る場合、之を間接大量觀察と稱し、本來の大量觀察即ち直接大量觀察と區別する。従つて結果たる統計も、間接大量觀察を行ふ場合に於ける大量觀察の理論的要求を満足する點に缺ける所があるだけ不完全であり、之を直接大量觀察の結果たる第一次統計と區別して第二次統計と呼び、統計としての性質を明らかにしてゐる。

第二次統計が、大量及びその集團性に就いて數量的に語る限りに於いて第一次統計と異なる所はないが、たゞ直接大量觀察の場合に於いては、大量觀察の理論的過程の規定に基づいて、之を實現し得る方法をその技術的過程に於いて探ることが出来るに對し、間接大量觀察に於いては、大量觀察以外の目的を以て作成されたる資料を利用するのであるから、理論的過程の規定を必ずしも満足するものではなく、(一)大量自體の規定に於いて、(二)集團性の方向の規定に於いて、不正確不充分なることを免れないから、従つて、所要の統計値を充分に得られないばかりでなく、統計値の示す大いさそのものが必ずしも正確でない場合があり得る。従つて第二次統計には統計としてそれだけ缺陷が伴ひ易いものであるが、併し實際問題としては、直接大量觀察の如きを常に行ひ得るものではなく、殊に動大量に就いて、間接大量觀察が主たる役割を演ずることとなるから(一)大量觀察に於ける理論的過程の規定を各個の大量に就いて、具體的に、且つ嚴密組織的

に、與へて置いて、(二)統計以外の資料作成に於いて、行政事務上(國家の調査であれば)統計上の要求を考慮して置くことが必要である。之を企業經營に就いて云へば、傳票は會計記錄として作成するのであるが、傳票がまた經營統計を求める上に利用せらるゝことを豫想し傳票に大量觀察に於ける理論的過程の規定から要求される統計關係事項を含ましむるか或はそれを考慮することが必要となる¹⁾。現在の我國の統計を問題にする場合、この當然なざるべき注意が何處まで行はれてゐるか、吟味を要する所であらう。

次に、技術的過程の省略の第二の問題であるが、この場合に於いては、過程の各段階は省略されないが、それが大量全體に及ばずしてその一部に限られる。一部調査の名のある所以である。従つて、大量觀察の本來の要求である大量の大きさ或は部分大量の大きさを示す統計値を絶對値として得ることは初めから不可能である。たゞ、その「一部」の採り方如何によつては、各個の集團性の方向に就いてその強度を近似的に求めることは必ずしも不可能ではない。蓋し特定方向の集團性の強度は、特定の部分大量の大きさと大量の大きさと比で測られるのであるから、この二個の大きさを示す統計値の比に近似する値は、大量の一部からも得られるからである。従つて大量觀察の實際的必要がこの範圍に限られ或はその範圍で満足し得るものであれば、その理論的過程の規定が充分である限り、一部調査を以て足る譯である。たゞ問題は、如何にして「一部」を選択するかに在る。勿論、集團性の強度に出来るだけ近似的な値を求むることが目標ではあるが實

1) 拙稿「經營分析と經營統計」經濟論叢昭和10年6月。

際問題として極めて困難な問題である。

大量の一部選擇に就いて、(一)客觀的な根據或は基準が與へ得る場合に就いては、その基準に依ればいゝから問題はない。(二)併しかゝる基準を明確に定めることは困難で、解析集團的研究を行ふより他はなく、この場合の基準は大數法則である。但し、實際問題として、大量自體の性質から、大數法則の適用を可能ならしむるが如き解析的集團の構成が困難で、極めて不明確な(一)の基準と(二)の要求を相當考慮した形式で「一部」を選擇するのが普通である。従つて一部調査の結果を可なり不正確なるものとして與へ、その結果として、これから誘導した値を不信用ならしめる。併し經濟統計と稱せられてゐるものは、その多くが一部調査の結果或は之から誘導せられたもので、之に正確性を與へることは極めて重要な問題であるが、その改善の方法は右の一部調査の性質に求めることが出来る。例へば現在行はれてゐる貨銀統計或は物價統計の如きは、この點で特に注意さるべきものであらう。

第三に技術的過程の省略として問題になるのは、この過程が殆どとられることなく既存の統計値或はその他の値から大量或は部分大量の大いさが算定される場合である。即ち推算或は推計と呼ばれるが、この場合に於いても、(一)理論的過程に於ける規定が充分に與へられてゐて、その規定の下に於いて所要の統計値が算定され、それらの統計値が一體を成して大量を語るものでなければならぬ。(二)而も各個の統計値を算定する場合、その算定に就いて客觀的な根據が示され

なければならぬ。併しこの二要件を満足することは事實困難で、推計は前記の一部調査その他に就いて補充的な方法として用ひられる場合が多く、之のみを以て大量を數量的に捉へることは不可能であると云つていい。たゞ測るべき大量の如きに於いては、各個の「單位」の大きさを異にするから、先づその大きさを測らねばならぬが、その大きさが直接測れずに推算する場合が多く従つて大量或は部分大量の大きさも結局推計によるものとなる。生産統計と稱するものにこの種のものが多から特に注意を要する。

要するに、上記の第二及び第三の場合は、結果に於いて、統計値或は誘導統計値（統計値に基づく計算値）を與へるが、併し本來の大量觀察を行つて得たものではなく、大量觀察法を基準にせる便宜的方法を採つた結果に他ならぬ。之を大量觀察法と區別して大量觀察代用法と呼ぶ。大量觀察代用法を採る場合に於いても、先に各場合に注意したやうに、大量觀察に於ける理論的過程の規定を前提するもので、その限りに於いて大量の數量的把握を目的とすることには區別がない。その意味で簡易大量觀察とも稱することが出来るであらう。

統計は大量觀察の結果たる一團の數字である。併し、大量觀察は上述の如く、（一）直接大量觀察、（二）間接大量觀察、（三）簡易大量觀察に區別し得べく、それによつて統計の正確性を異にするが、兎に角何れも大量の數量的把握を目的とするもので、之を總括して統計調査と呼ぶことが出来る。この意味に理解する限り、大量を統計として捉へることを目的とする調査或は簡

1) 拙著、統計學研究第一卷 p. 140.

2) 拙著、統計學概論 p. 95.

單に統計を求める調査が統計調査であると云つても誤解を生ずる惧はないであらう。

三

統計調査を右の如く規定すれば、調査方法としての統計調査法及びその適用に關する諸問題は自ら之を捉へることが出来るであらう。而してそれが統計調査論の課題である。

統計調査法それ自體の問題としては、大量觀察法の問題及び大量觀察代用法の問題に大別して見られるであらうが、その何れにしても大量觀察に於ける理論的過程の規定に關する問題は統計調査法として共通の問題である。而してその理論的研究は學問としての統計學の課題であり、實際的には調査者が具體的に之を把握し、統計調査の實施に當り指導原理とし、また之を實現し得るだけの組織・手段を講ぜねばならぬ所のものである。述べるまでもなく、現在に於いて最高最大の調査者は國家である。従つて、國家としては、統計調査に關する機關を整備し、殊に、一切の統計調査を指導統一する中央機關を設けて、先づ大量觀察に於ける理論的過程の規定に就いて、具體案を確立しなければならぬ。既に述べたやうに、統計調査に於いて間接大量觀察を行ひ或は行はざるを得ざる場合多く、而もそれには一定の資料の存在を必要とするがゆゑに、統計調査を必要とする限り、豫め如何なる資料を如何に必要とするかを指示し、之を整備せしむることが重要である。また簡易大量觀察を行ふ場合に於いては、之を補完する種々なる統計値を必要とし、之がためには組織的に各個の統計調査が行はれて、所要の統計が存在しなければならぬ。従つて

中央統計調査機關が國家の統計調査を組織的に指導するといふことは極めて重要な意義をもつものである。

かゝる中央機關の中樞的機能の他に、勿論技術的過程から見てその機能を考へる必要があり、また之に關聯して各個調査機關並にその組織が問題となる。この意味に於いて、統計調査機關の問題は統計調査論の一課題として重要であるばかりでなく、現在の國家殊に統制經濟政策を強調する國家にとつては、具體的に解決せねばならぬ問題である。蓋し如何なる意味に「統制」を解するにせよ、それが眞面目に主張される限り、統計調査を前提せざる統制政策はあり得ないからである。併し多くの場合この點が全然看過されてゐることを認めなければならぬ。それは如何なる理由によるものであらうか。

次に大量觀察に於ける技術的過程の問題としては、各種の大量觀察によつて之を異にするが、その主たるものは、先に述べたる統計調査機關の問題を併せて次の如きものを擧げることが出来るであらう。

(一) 統計調査機關及びその組織の問題

(二) 統計調査従事者及び被調査者の問題——専ら統計教育の問題である。之は(1)社會科學的教養を與へるための統計教育、(2)統計技術者養成のための統計教育、(3)社會教育乃至は公民教育としての統計教育等の問題が考へられる。我國に於いては特に一般から注意されねばならぬ問題である。

(三)調査票の問題——調査票は、技術的に各方面から研究さるべきで、技術的過程は専ら之が運用の過程に他ならぬが、それにも増して重要なことは、之が調査に於ける理論的過程の諸規定を具現する形式たる點に存し、而もその作成の如何は、調査者と被調査者の協力の程度を支配する。獨立の一研究問題たる所以である。

(四)構成的統計系列の問題——大量の記載形式としての構成的統計系列は、從來解析的統計集團の記載形式としての解析的統計系列と同一に扱はれてゐるが之を區別しなければならぬ。而して大量觀察の結果たる統計をしてよく大量並にその集團性を語らしむるために、その記載形式としての構成的統計系列の性質を研究することは重要である。具體的に次の諸項の問題と直接關係する。

(五)基本的誘導統計値としての(1)統計的代表値及び(2)統計的比率の問題——これらの値を求めることが統計調査の最後の目的であるが、一般的に所謂「平均」及び「比率」として論ぜられるにも拘らず、基本的誘導統計値としてはなほ充分に考へられてゐない。この問題は、平均或は比率としての形式的問題であると共に、大量或は構成的統計系列によつて規定される實質的な内容をもつ問題である。

(六)構成的統計表の問題

(七)構成的統計圖表の問題——(六)及び(七)は構成的統計系列の表示形式であり、大量を反映す

る。之が技術を誤れば如何なる大量観察も結局無意味に歸する。近來これらの研究は相當盛であるが、併し、之を大量観察法或はひろく統計方法の問題として捉へてゐない。従つてなほ多くの問題を殘してゐる。

これらの諸問題は、統計調査従つて大量観察そのものゝ性質から理論的に研究されなければならないが、また同時に過去及び現在の統計調査の實績を検討し、之を具體的に見る必要がある。而してその爲めには問題を單に統計調査自体に限らず、之の行はるゝ地盤との關係を明らかにしなければならぬであらう。蓋し、大量が社會的存在であるばかりでなく、その調査もまた一定の社會的關係とその制約の下に行はるゝものだからである。この意味に於いて、統計の解説・吟味・批判はその具體的問題として重要な意義を有する。¹⁾

上述の如く、本文は、「調査」の一般的意味・性質から「統計調査」の意義を明らかにし、その調査方法及びそれに關する問題を論じ、併せて統計調査論に於ける問題とその所在を紹介することを目的としたものであるが、今後更に機會を得て各個の問題を詳論し統計調査論として完成したいと思つてゐる。その意味に於いて本文は、それが緒論の地位を占むる一篇に他ならぬ。併しその範圍に於いても、現に行はるゝ統計調査の實際問題に就いて言ひ及ぶべきものが多々あることを思ひ、殊にその批判の必要なることを感じないではないが、こゝでは、統計調査の一般の問題として、それが何を要求し如何なるものでなければならぬかを明らかにすることによつて、現實の歪みを見るにとどめたのである。

1) 拙著、統計學研究 第一卷研究第二。